

「アンナと無垢な帝王」

木本雅彦

ノックの音がする。

ドーン、ドーン、ドンドンドンドン。

「雪だるま、つくーろー」

「うるせえ」

幼馴染みのアンナは、いつも俺の眠りを邪魔する。はっきりと言うが、うざい。

ギャルゲーに出てくる幼馴染みは、眠りを邪魔するにしても、もう少し愛嬌があるのに、俺の幼馴染みは邪魔ばかりだ。

うざい、本当にうざい。

「ねー、ねー、雪だるまー」

「うるせえ。俺は寝ている」

「そんなこと言って、昨夜もネットしてたんでしょ。就職しなよ」

「放っておいてくれ。今さら俺なんか就職できるはずないだろ」

「できるよ」

「どうやって」

「真実の愛の力で」

「本当か？」

「本当よ。私を信じて！」

俺はアンナを信じることにして、仕事を探しにハロワに向かった。

「とりあえず契約社員から始めて、実績によつては正社員採用もある職があつた」

「やったじゃん！」

「でも俺、正社員になれるかな」

「なれるよ！ 真実の愛の力で！」

「そうか」

俺はまずは勤勉を心がけ、まじめに仕事をこなしていった。

「正社員として採用されたよ。このまま頑張れば、ちゃんと昇進していけるキャリアパスもあるって」

「すごいじゃん！」

「でも俺、会社員としてやっていけるかな」

「できるよ！ 真実の愛の力で！」

「そうか」

俺はがむしやらに働いた。盲目としか言えないような働きっぷりだった。

「今度支店長を任されることになったんだ」

「すごいじゃん！」

「でも俺、支店の取りまとめなんかできるかな。地元の人とも仲良くやっていく自信ないし」

「できるよ！ 真実の愛の力で！」

「そうか」

俺が任された支店は、どんどん成績をあげていき、全国でもトップの支店としてテレビの取材も訪れるようになった。やがて、幹部候補としてのポストが提示された。

「俺さ、組織の中で収まってもいいのかなって思い始めてさ」

「飛び出しちやいなよ」

「できるかな」

「できるよ！ 真実の愛の力があれば！」

「そうか」

俺は会社を辞めて、途上国支援のボランティアに参加した。苛酷な環境だった。

紛争がようやく終結したばかりの地域で、病氣の人、重度の怪我を負った人、辛い目にあっている人が沢山いた。俺は献身的に働いた。

「俺さ、色々考えちゃって」

「どうしたの」

「世界平和のために、俺は世界を統一しなければならぬんじゃないかって」

「すごい！ 大志だね！」

「できるかな」

「できるよ！ 真実の愛の力で！」

「そうか」

俺は同志を集め、世界統一に乗り出した。それは険しい道だったが、俺には大義があり、大志があった。そして真実の愛の力も俺に味方していた。

「なんか、空しいんだ」

「どうしたの」

「俺は世界を掌握した。俺は世界に秩序を構築した。俺の力で、世界は平和になり、安定が訪れた。俺は世界であり、世界は俺だ。だがしかし、俺はこの地上に留まっていけないのだろうか。俺のスケールはその程度なんだろうか」

「突飛だね！」

「俺は宇宙に行きたい。あの軌道上から、世界を眺めてみたい」

「できるよ！ 真実の愛の力で！」

「そうか」

俺は関係各機関に指示を出し、ロケットを用意させた。

第一宇宙速度は気合いで越えた。これまでの苦勞を考えれば、たいしたことはない。宇宙は孤独だったが、俺はすぐに慣れた。宇宙は広い。無限だ……無限？ いや、本当に無限なのか？ そんなはずはない。俺が知らないだけだ。

俺にはまだまだ知らないことがある。こんなところで止まっていけないだろうか。

「俺は考えたよ。軌道上で虚空と地上の両方をみつめながら、一生懸命考えた」

「哲学だね！」

「人類はもっと遠くまでいける。可能性を無視してはいけない」

「フロンティア精神だね！」

「俺たちは前進し続けなければいけない。それが人類の運命なんだ。だから俺は、旅立とうと思う」

「できるよ！ 真実の愛の力があれば！」

「ああ、間違いない」

「あ、そうそう、報告があるのよ」

「なんだ」

「妊娠したわ」

「え！ ……そ、そうか、じゃあ、俺と……」

「あ、キミの子供じゃないから」

「え？」

「え？」

「え、だって、ほら俺たち」

「大丈夫、ちゃんと計算してるよ！ 真実の愛の力でね！」

「真実の愛の力……」

「そう、だから心配しないで。私、幸せになるよ」

「そ、そうか」

こうして俺は、移民船団を構築し、地球を飛び出した。

目指すは外惑星と、さらに先。俺は止まらない。俺に限界はない。俺は宇宙の帝王になる。

先に、先に。前に、前にと進むのが、俺の生きかた。すなわち、俺のありのままの姿。
「♪ありのー、ままのー、姿みせるんだぜー」
俺の歌声は、宇宙に響く。